

平成24年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成24年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 マアナゴ

学名 *Conger myriaster*

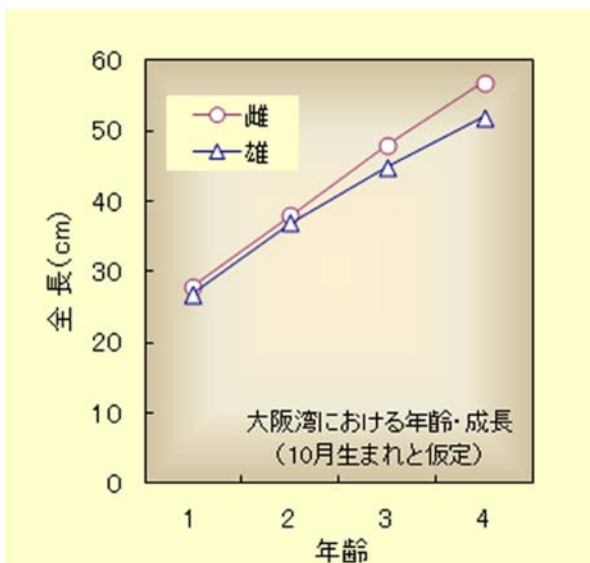
系群名 伊勢・三河湾

担当水研 増養殖研究所



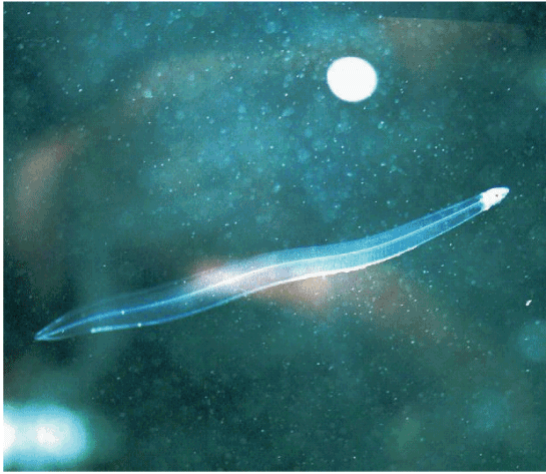
生物学的特性

寿命: 湾内最高齢は3歳
成熟開始年齢: 不明、雌雄とも成熟個体が見つかっていない
産卵期・産卵場: 産卵場の一つが沖ノ鳥島南方の九州パラオ海嶺付近に確認されている、産卵期の詳細は不明
索餌期・索餌場: 周年、伊勢・三河湾
食性: 小型の底生生物、エビ類、魚類、軟体類など、成長につれ多様化大型化
捕食者: 不明



漁業の特徴

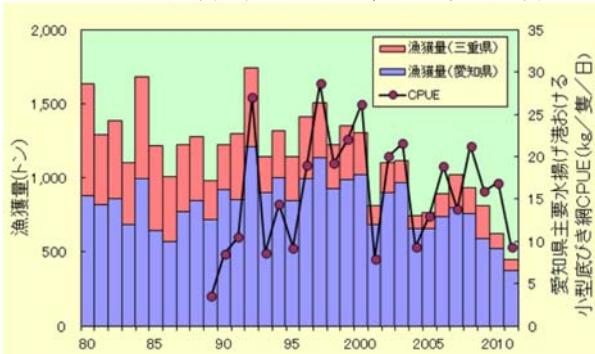
伊勢・三河湾における漁獲は主として、小型底びき網漁業、かご漁業により行われている。伊勢湾の三重県海域での小型底びき網の漁場は、湾奥部と湾口部を中心に、伊勢湾全域に形成される。かご漁業の漁場は、沿岸に沿って広く形成される。愛知県においては、知多地区の漁獲量が多い。また、本種の仔魚であるレプトケファルス(のれそれ)は、船びき網により混獲されている。



マアナゴの仔魚(レプトケファルス)は「のれそれ」と呼ばれ、春季に湾内に来遊して船びき網などで混獲される。沿岸域に来遊する以前の生態は不明である。

漁獲の動向

愛知県及び三重県における1980～2000年の漁獲量は、概ね1,000～1,500トンの範囲内で推移していたが、2001年以降は1,000トン以下の水準に減少し、400～1,000トン台の水準で増減している。2002、2003、2007年には1,000トンを超える漁獲が見られたが、2011年の漁獲量は451トンであった。

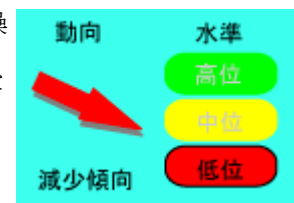


資源評価法

近年、漁獲努力量の著しい減少が認められることから、小型底びき網のマアナゴCPUEを資源量指標値とした。特に、伊勢・三河湾におけるマアナゴ漁獲の70%以上を占める愛知県の主要水揚げ港を根拠地とする小型底びき網漁船によるマアナゴCPUEの推移を基に資源状態を判断した。その他、漁法別月別漁獲量の推移、各県の生物情報収集調査、標本船調査および漁場一斉調査の結果も現在の資源状態の判断材料とした。

資源状態

資源量指標値とした小型機船底びき網漁船のマアナゴCPUEは、数年周期で増減を繰り返している。過去23年間の資源量指標値の最大値と最小値間を三等分して水準を判断すると、現在は低位水準にある。動向は過去5ヶ年の資源量指標値の推移から減少と判断される。



管理方策

本評価対象は、春季に仔魚(のれそれ)として伊勢・三河湾内に来遊したものが、その年の秋～冬季に漁獲加入し始め、翌年の春～夏季に漁獲の中心となる。したがって加入量あたりの漁獲量を増大させることを管理目標とした場合、秋冬漁期の小型魚を保護することが有効な管理方策となる。そのため、資源管理指針・計画の下、小型底びき網およびアナゴ籠に入網した小型魚の水揚げ禁止、再放流、漁具の目合い拡大等の措置がとられている。さらに、マアナゴ資源に対する影響を考慮し、船びき網等による「のれそれ」を対象とした操業を制限する管理措置もとられている。

資源評価のまとめ

- 小型底びき網によるマアナゴCPUEの経年変化等から判断して、伊勢・三河湾のマアナゴ資源は低位水準にある
- 過去5ヶ年のマアナゴCPUEの推移から、動向は減少と判断される

管理方策のまとめ

- 伊勢・三河湾のマアナゴ資源量は、湾外から来遊する仔魚(のれそれ)の多寡により変動するものと推測され、漁業管理による加入量の制御は困難。加入量あたり漁獲量増大のため小型魚の保護が有効。
- 加入量あたり漁獲量の増大が目標
- 秋冬漁期の小型魚の保護が主要な管理方策
- 「のれそれ」を対象とした操業を制限

執筆者:黒木洋明・澁野拓郎

資源評価は毎年更新されます。